

長野県松本市

TAKAMIYA

高宮遺跡Ⅲ

—レセプションハウス ザ・ブライトガーデン レストラン建設に伴う記録保存—



2004.3

松本市教育委員会

例 言

- 1 本書は、平成15年8月1日から同年9月16日にかけて実施された長野県松本市高宮東209-2・5、204-4・6・7に所在する高宮遺跡第3次緊急発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、株式会社アステップ信州によるレストラン建設事業に伴う緊急発掘調査であり、同社より松本市が委託を受け、松本市教育委員会が発掘調査を実施、本書の作成を行ったものである。
- 3 本書の執筆は、Ⅱ-3、Ⅲ-3、Ⅳ：和山和哉、その他を山本紀之が行った。また編集は和田が行った。
- 4 堆積土層の上色観察表記にあたっては「新版標準土色帖2001年版」を使用した。
- 5 今回調査で使用した遺構番号は、過去行われた第1次、第2次調査の続き番号を使用し、以下のとおりとなっている。また略号も以下のとおりである。
土坑→土：土59～63 溝→溝：溝2 土器集中区→土集：土集17～19
暗渠排水施設→暗：暗16～24
- 6 図中で用いた方位記号は全て真北である。
- 7 本調査で得られた出土遺物および調査現場で作成した測量図面・写真等の諸記録は、松本市教育委員会が管理し、松本市立考古博物館（〒390-0823 長野県松本市中山3738-1 TEL:0263-86-4710 FAX:0263-86-9189）に保管・収蔵されている。

目 次

例言 目次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	3
2 調査体制	3
II 遺跡の位置と環境	
1 位置と地形	5
2 地層と堆積	5
3 歴史的環境	6
III 調査結果	
1 調査の概要	9
2 検出された遺構	11
3 出土した遺物	14
IV まとめ	16

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

高宮遺跡では平成5年と平成9年に調査が実施されており、古墳時代中期の遺構・遺物が発見されている。特に平成5年に行われた調査（第1次調査）では、おびただしい数の土器・玉類等が出土しており、県下でも非常に珍しい水辺祭祀遺跡と位置づけられた。

平成14年、国道19号線の東側、平成9年に行われた発掘調査地（第2次調査：現在はレセプションハウス ザ・ブライトガーデンが所在）に南接する箇所にレストランを建設する事業計画が申請された。当該地は遺跡と推測される範囲に含まれていたため、申請者の㈱アステップ信州と松本市教育委員会との2者において埋蔵文化財保護のための協議もたれた。そこでは今回の申請地が第2次調査地の南隣であるゆえ、遺構・遺物の存在する可能性があり、レストラン建設によりそれらが破壊されるおそれがある状況が確認された。よってまず試掘確認調査を実施し、その有無や存在する深さを確認することになった。

試掘確認調査は平成15年7月8日、重機によって申請地内に3本のトレンチを設定し行われた。その結果、駐車場として使用されていた申請地に以前存在していた、鉄骨3階建て程度のコンクリート基礎が地中にそのまま残っていたものの、基礎と基礎の間には遺構・遺物が存在していることが判明した。そのため再度両者間で協議の場が設けられ、建物基礎が入る範囲を主に調査区を設定し、発掘調査を実施し記録保存することとなった。

平成15年8月1日付で㈱アステップ信州と松本市との間で埋蔵文化財発掘調査の委託契約を締結し、松本市教育委員会が調査団を組織して調査を実施した。現場での調査は平成15年8月1日から同年9月16日の間(実働17日間)で行い、調査面積は295㎡であった。

2 調査体制

(1) 調査団

調査団長 竹淵公章(松本市教育長)

調査担当 和田和哉(文化課主任)、山本紀之(文化課嘱託)、菊池直哉(同)

調査員 今村 克

協力者 (発掘作業) 浅輪敬二、上條道代、小松正子、鷺見昇司、中曽根和明、丸山恵子、
百瀬二三子、横山 清、米山祝興

(土の洗浄) 入山正男、真々部まさ子

(2) 事務局

松本市教育委員会教育部文化課

有賀一誠(課長)、熊谷康治(課長補佐)、田口博敏(同)、直井雅尚(主査)、

栗田幸信(主任)、久保田剛(同)、櫻井 了(主事)、渡邊陽子(嘱託)、

太田万喜子(同)



第1図 高宮遺跡と周辺の遺跡 (S=1/10,000)

II 遺跡の位置と環境

1 位置と地形

本調査地は松本市高宮東、国道19号線東側一帯に存在する住宅地の一角で、高宮遺跡第2次調査区に隣接する場所に位置する。標高はおよそ588m、高宮遺跡第1次調査地は西へ約200m、出川西遺跡第3次調査地は南へ約200mの距離を測る。現状は駐車場であったが、前身は鉄骨3階建程度の建物が建設されていた。この付近一帯は、第2次世界大戦前後までは湧水に恵まれた水利の良い稲作地域となっていたのであるが、国道19号線の開通に伴いわかに都市化開発が進んだため、現在では自然地形の展望は困難なものとなっている。地形上は松本市に流入する諸河川の複合による沖積扇状地性堆積や三角州性堆積の南西端にあたり、主として奈良井川の影響を受けている。西の奈良井川現河床との距離は約1,500m、東の田川現河床との距離は約950mを測る。地形面は北北東へ極めて緩く傾斜(5/1,000)しており、堆積地形扇端部分にあつている。現在は埋め立てられて見られなくなっているものの、地下水位が高いため、かつては多くの湧水口がいたるところに口を開けていた。これらの湧水は主に夏季だけ顕著にみられ、他の季節には湧水が止まり乾田化することから夏季だけの湿地状態という結果になり、腐食は植物の遺体として残りにくい状態になっている。大量に湧き出る湧水の水源は上流からの浅層の伏流水とみられるが、今回の調査区内においても第2次調査区内同様に全域から暗渠排水施設の溝が検出されている。現在では、上流域での水田の減少や深井戸の普及で減水しているため、灌漑は深井戸揚水が利用されている。

2 地層と堆積

この地域の堆積層は奈良井川(中・古生層系統)による砂質土・砂質粘土・砂礫層からなっている。沖積扇状地性堆積や三角州性堆積の扇端に形成される厚さ5~10mの厚い細粒堆積物の中に、それぞれの時期に応じた砂礫層が貫入していると考えられている。

今回の調査地を見ると、深く掘り下げた調査区南壁際の試掘溝内で現地地下200cm前後に砂礫層が見られた(湧水のために掘り下げ直後に埋め戻す)。

基本土層としては、形成順(下層から)に見ていくと、①砂礫層、②雲母片を含む砂層(高宮遺跡第2次調査における「灰色砂質土」)、③灰色シルト層(高宮遺跡第2次調査における「鉄分沈着灰色粘土層」)、④灰色シルト質粘土層(遺物包含層)、⑤黒色シルト質粘土層(旧水田耕作土と床土)、⑥建物を造る際の盛土層の順になっており、暗渠排水施設は⑤黒色シルト質粘土層(旧水田耕作土と床土)直下に構築されている。

現地形面では北北東方向へ極めて緩く傾斜している状態が見取れるのであるが、地層堆積状況を見る限り、調査地北側部分が高く、南から南西方向に向かって低くなっている。この南側低地部分は湧水の滞水の影響があるのか地層は北側部分に比べ複雑な堆積となっている。この低地部分から南側にかけての地域は低地性の湿地状態もしくは流れのゆるやかな滞水性の流路の可能性が高く、位置的にみて高宮遺跡第1次調査地で検出され祭祀遺物が多数出土した流路との関連性も充分考慮してよいと思われる。

調査地北東隅では、地層が東方向に傾斜して落ちていることから、高宮遺跡第2次調査で検出された流路2へ続くものと推定された。また灰色シルト層内には下層の砂層からの砂の貫入がいたるところに見られ、その断面形態から湧水の吹き上げに伴うものと考えられた。

3 歴史的環境

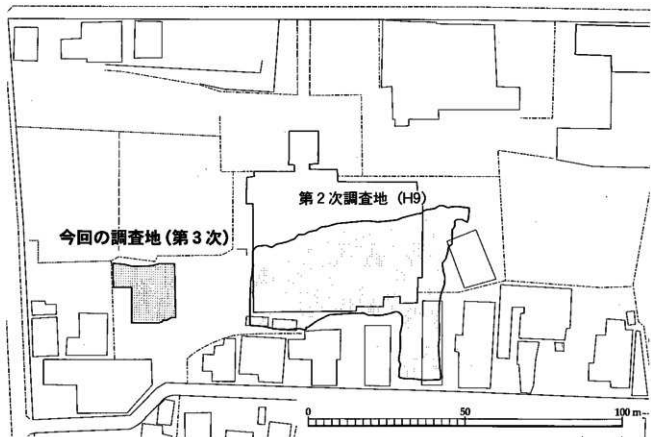
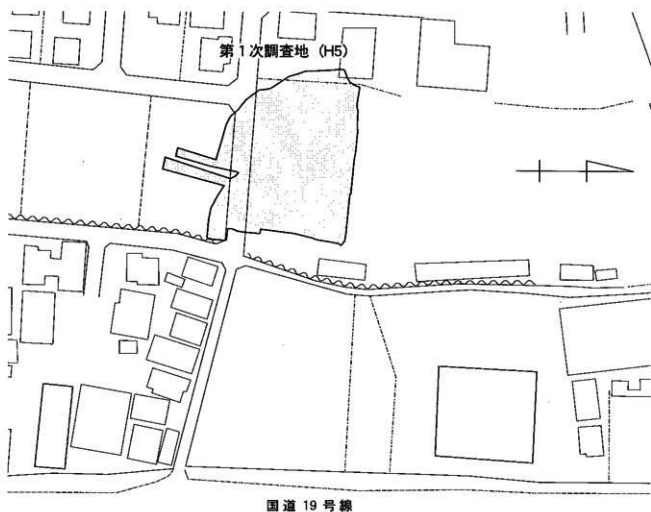
高宮地区とその周辺は奈良井川と田川に挟まれた平坝で湧水点の多い地域である。この一帯は両河川が形成する沖積扇状地性堆積や三角州性堆積の末端に位置しており、遺跡群はこの沖積台地上に形成されている。この地区は近年、開発が急速に進んだことから、それに伴う発掘調査も数多く実施されるようになり、その結果南部を中心に弥生時代から平安時代にかけての遺跡の発見が相次ぎ、当地区における原始・古代の状況が徐々に明らかにされている状況となっている。

平田北遺跡第6次調査(第1図・8)で弥生時代中期前葉～中葉の土器片、出川西遺跡第2次調査(6)で弥生時代中期中葉の土器片及び中期後半～末の竪穴式住居址、高宮遺跡の第1次調査で弥生時代中期後葉の土器片が確認されており、およそ2,000年前、弥生時代の中頃からこの周辺に人々が暮らし始めたと考えられている。つづく弥生時代後期では、出川南遺跡第1・6・11次調査(7)で竪穴式住居址が見つかった。

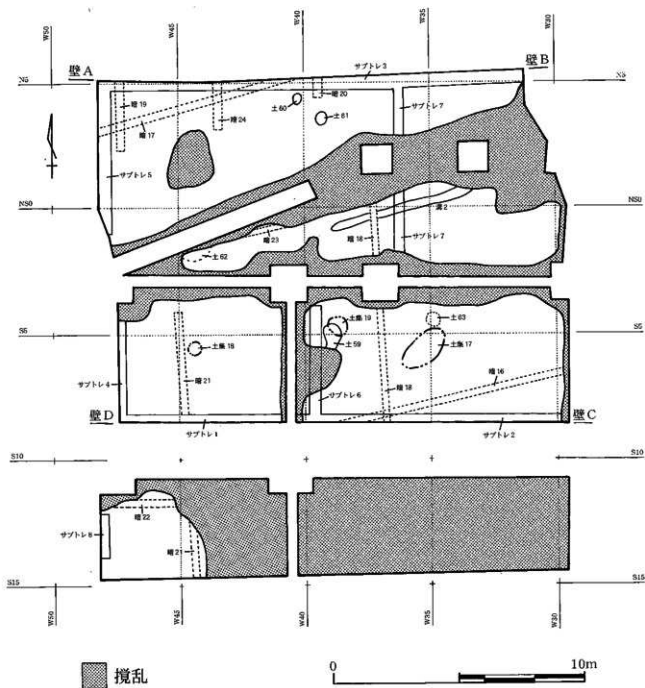
高宮遺跡第2次調査では、流路内から弥生時代後期後葉箱清水式の名残を残す甕や、東海系のパレス壺が出土しており、弥生時代末とも古墳時代初頭とも言える時期の集落が存在することが伺われる。出川南遺跡第9次調査では、これよりやや時期は下のもの、東海系を含む古墳時代前期の土器がまとまって出土している。また出川西遺跡では該期の土器が採集されており、発掘調査で竪穴式住居址等の遺構も検出されている。これら集落は当遺跡から東へおよそ2kmの中山丘陵突端に存在する、東日本最古の古墳と考えられる弘法山古墳を築造した集団を考える上で興味深い遺跡である。つづく古墳時代中期では、高宮遺跡の第1次調査で500個以上の土器、5000個以上の玉類、石製模造品、鎌や剣、鏃等の鉄製品が見つかり、県内でも稀有な水辺の祭祀遺跡と認識された。また出川西遺跡でも、同時期の土器が集中して出土する箇所が19ヵ所見つかり、意図的に置き去られた状況がうかがえるため、祭祀的な性格を有すると推察された。よって当遺跡から出川西遺跡にかけての一帯が祭祀にかかわる特別な空間として認識されていた可能性が考えられた。また出川南遺跡第4次調査では、5世紀後葉から6世紀初頭の古墳(平田里古墳)が3基発見され、1号墳の周溝から多量の埴輪・土師器・須恵器が出土している。この後古墳時代後期以降になるとこの周辺の集落規模が大きくなる傾向が見え、出川南遺跡第4次調査で竪穴式住居址119軒が、そして奈良時代から平安時代前期にかけては出川南遺跡、平田北遺跡、平田本郷遺跡等で数多くの竪穴式住居址が見つかり、規模の大きな集落が存在したことが判明している。10世紀代の集落は現時点でははっきり確認されていないものの、平安時代後期から中世にかけては当遺跡より南側の平田本郷遺跡・小原遺跡・高畑遺跡等で大規模集落として発展していくことになる。

当遺跡の東側、田川右岸の中山丘陵山麓沿いに存在する遺跡については、基本的に中世以前は洪水を受けない安定した場所に広範囲にわたって立地していたものと考えられている。しかしこれらの遺跡群も、近世以降東側を流れる牛伏川によるしばしば氾濫で破壊が進み、現状の遺跡分布は氾濫の影響を受けていないもののみを把握している状態となっている。このように牛伏川の氾濫による破壊を免れた部分における遺跡群ではあるものの、弥生時代中期以降、百瀬式土器標式遺跡である百瀬遺跡をはじめ、竹瀬遺跡・竹瀬南遺跡でも規模の大きな集落が営まれ、この後中世に至るまで、断続的ながらこの一帯に集落が形成されていたことが調査によって解明されつつある。又、奈良井川の河岸段丘上に位置する奈良井川西岸の遺跡群では、7世紀後半頃から本格的集落が出現し、水路等の計画的開発により下神遺跡・南栗遺跡・北栗遺跡などでは、奈良時代から平安時代前期にかけての大規模集落が形成されていた。これらの集落は10世紀後半に一時的に衰えるものの、11世紀以降から中世にかけて再開発が進み集落の定着が進んだものと考えられる。

なお当遺跡の北側一帯は、地下水位が高く湧水地点が多数存在する地域であり、居住には適さない様である。小島遺跡(4)と中世の井川城址(3)が遺跡として認知されているが、その内容は把握できていない。



第2図 発掘調査範囲



第3図 調査区内遺構配置図 (S=1/150)

Ⅲ 調査結果

1 調査の概要

松本市内において、松本市南部の南松本周辺は近年特に大型店の進出による商業開発をはじめ人口増加による宅地造成などが進み、工事に伴う遺跡発掘調査が数多く実施される地域となっている。高宮遺跡も例外ではなく、平成5年には土地区画整理事業による第1次調査、平成9年にはレセプションハウス ザ・プライトガーデン建設工事に伴う第2次調査と過去に2度の調査を行っており、その成果から、長野県下でも稀有な水辺にかかわる祭祀遺跡の可能性を指摘されている。

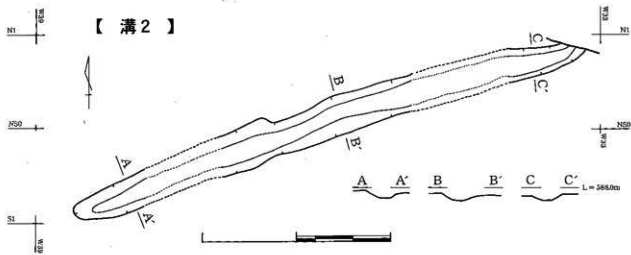
今回の調査地は、古墳時代中期集落址と白玉・ガラス小玉の玉類を検出した第2次調査区に南接している場所であり、遺構・遺物の存在が推定されたことから、開発により建築される建物の基礎がはいる部分に限定して調査を実施した。調査地の現状は駐車場ではあったが前身は鉄骨3階建程度の建物が建設されていたことから、地中にはコンクリート基礎がそのまま残っていた。このコンクリート基礎を取り除くことが出来なかったため、そのまま基礎部分を残した状態で調査を開始した。遺構の測量作業に際しては、基準国七土座標に応じて調査区を3mのグリッドで覆い、縮尺1/20で測量した。座標原点(NS0,EW0)は、X=23900.000、Y=-48100.000である。

調査開始直後は順調に作業が進捗していたのであるが、以後湧き出す水と表面からしみ出す水の対応に苦慮することとなり、排水用のトレンチを掘る等、検出面の乾燥を促す処置を施し、さらに1週間の作業休止期間を設けて状態の好転を願ったのであるが、湧き水の状態はいつにも改善されず、日がたつにつれ水の量も増えているように感じられた。そのため平面での遺構検出作業を断念し、一辺1mのグリッドを設定、各グリッド各々15cm程度掘り下げを行うことで、その断面観察により遺構の有無をチェックする調査方法に切り替えて調査を進めた。遺物は各グリッド毎（測量時に設けた座標値を元に、各グリッド内の座標値の最小値をもってそのグリッドを呼称することにした）に取り上げ、分布の濃淡が明確になるよう（第6図）に配慮した。その結果、遺構の存在ははっきりしなかったものの、遺物の分布状態から3ヶ所に遺物の集中する場所があることが確認できた。これらは水が特に湧き出る場所とほぼ重なることから、過去における高宮遺跡の発掘調査結果で指摘される水辺の祭祀の可能性を考える上で一つの出土例として例示できるものではないかと思われた。

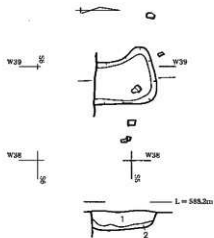
今回の調査では住居址等の居住関連の遺構を確認することができなかった。しかし、人工的な溝と土坑を検出しており、調査地部分も当時の人々の生活圏の一部であった可能性は大きいものと思われる。また、昭和初期まで付近一帯には湿地帯が広がっていたということなので、排水には先人も苦労したものと見え、拳大の石を両側に平行に並べ、厚さ1cm前後・幅20cm程度の板を石列の幅に切断して蓋板として置く等の丁寧な造りの暗渠排水施設が調査区全域にわたって9本掘られていた。暗渠覆土内より18～19世紀の肥前産磁器片が出土しているの、江戸時代後半期以後から現代までに構築されたと推定される。

検出遺構としては、古墳時代の土坑1ヶ所および土器集中区3ヶ所、時期不明の溝1本および土坑4ヶ所、江戸時代後半期以降の暗渠排水施設9本であった。又、遺物としては、5世紀代の土師器片(テンバコ0.5箱分)、18～19世紀の陶磁器片(数点)、時期不明の自然遺物骨片(2点)などが出土した。

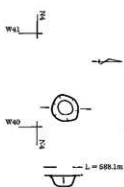
土器集中区周辺の土を持ち帰り洗浄作業を行ったが、玉類等の遺物は含まれておらず、黒曜石小剥片1片や土器細片数点が見られた程度であった。



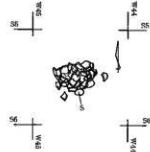
【土59・土器集中区19】



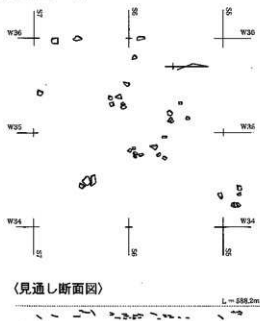
【土60】



【土器集中区18】



【土器集中区17】



【土59 土層観察】

- 1 : 5Y 2/2 オリーブ黒色の粘土に 10YR 4/4 褐色の粘土を5%含む
- 2 : 5Y 4/1 灰色の粘土に 10YR 4/4 褐色の粘土を30%含む

【土60 土層観察】

- 1 : 2.5Y 3/2 黒褐色の粘土に 2.5Y 4/3 の粘土を15%含む

第4図 検出遺構平面図

2 検出された遺構

(1) 古墳時代中期の遺構

【土坑59・土器集中区19】 土器破片が集中して分布していたことから平面プランの確認が出来る土坑で南側を掘乱に切られている。残存部分規模は約60×70cm、検出面からの深さは平均20cm。底面はほぼ平坦である。しかし、出土土器の分布が土坑の範囲より外側に広がっていることがわかり土坑59周辺出土の土器破片はあらためて土器集中区19出土として取り上げを行った。

【土器集中区17・18】 土器破片が集中している部分を土器集中区とした。土器集中区17は、平面で2×2m、厚さ10cm程の範囲内に土器片が散在していた。甕や高杯の破片が希薄に広がっている状態で、接合できる破片はあるものの、図化するまでのものは見られなかった。土器集中区18は、50×40cmの範囲内でかたまって土器が出土したものである。両土器集中区とも精査を行ったが遺構の確認は出来なかった。

(2) 近世の遺構

【暗渠排水施設】 近年まで水田として利用されていたことと、大量に湧き出る湧水処理のための暗渠排水施設が調査区内に9本布設されていた。出土遺物から時期的には開墾の進んだ江戸時代後半以降のものと思われる。南北方向が5本、東西方向のものが4本あり各方向それぞれでほぼ平行するように構築されており構築形態は次に示すように3種類見られた。



①暗渠内全体に小礫が詰められているもの(暗渠17・23)



②暗渠部分両端に平行して小礫を列状に2列並べ礫間に板を蓋板として渡すもの(暗渠16・18・19・20・21・24)

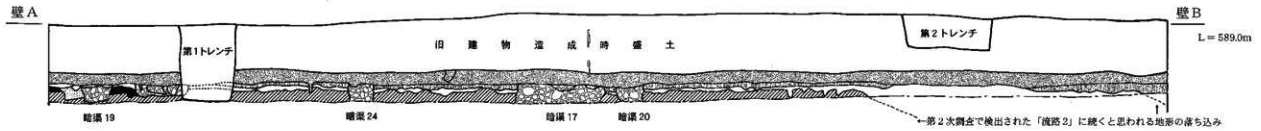


③暗渠部分両端に平行して小礫を列状に2列並べさらに中央にもう1列礫列を配置して両端礫間に平な石を蓋石として渡すもの(暗渠22)

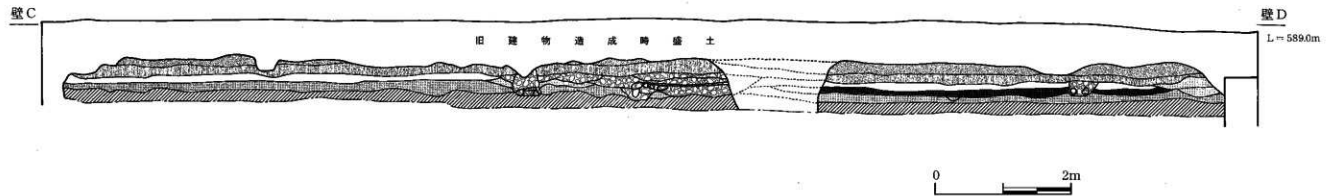
(3) 時期不明の遺構

【土坑60・土坑61】 湧水の湧出量が少ない場所の検出面でかろうじて確認できた遺構で、直径30cm前後、深さ20～30cm規模を測る。覆土は黒褐色粘土が入っており単層であった。土坑というよりピットとしての性格を有するものと推定された。各土坑から遺物の出土はない。

調査区北端土層断面図



調査区中央土層断面図



- | | |
|--|---|
| ① 7.5Y 2/1 黒色 シルト質粘土 φ5mm迄の砂粒を含む⇒旧水田耕作土 | ⑥ 7.5Y 4/1 灰色 シルト質粘土に10YR 4/6 褐色粘土（植物腐敗物）を7%含む |
| ② 6Y 2/1 黒色 シルト質粘土⇒旧水田床土 | ⑦ 5Y 3/2 オリーブ灰 粘土に10YR 3/3 暗褐色の植物腐敗物が80%入る |
| ③ 10Y 4/1 灰色 シルト質粘土上に5Y 4/2 灰オリーブ色の粘土（植物が腐敗したものに鉄分が沈着したもの）が30%入る | ⑧ 7.5Y 4/1 灰 シルトに2.5Y 4/4 オリーブ褐色の粘土（植物が腐敗したものに鉄分が沈着したもの）が10%入る 調査区東側では粘性が強くなる |
| ④ 10Y 4/1 オリーブ層 粘土に2.5Y 4/4 オリーブ褐色の粘土（植物が腐敗したものに鉄分が沈着したもの）が3%入る | ⑨ 近世以降の暗渠排水施設の覆土 |
| ⑤ 7.5Y 2/1 黒色 シルト質粘土に10YR 3/3 暗褐色の植物腐敗物が1%含まれる⇒調査区の西側のみにある層積層であり、他の層と比較して遺物が多い遺物包含層である | |

第5図 土層断面図

【土坑62・土坑63】 土坑62は攪乱によりほとんど破壊されており規模等は不明である。覆土が他の土坑とは異なるため、上面からの掘り込みによるものかもしれない。土坑63は土層断面で確認されたもので、断面の確認で径60cm程を測る。湧水が著しい箇所であったため、平面での遺構輪郭は把握できなかった。覆土は灰色のシルト質粘土に、植物腐敗物に鉄分が沈着した粘土が混ざったものであった。両土坑とも遺物の出土は皆無である。

【溝2】 グリット毎の掘り下げ当初には、湧き水により検出できなかったが、掘り下げていく過程でその輪郭が浮かび始めたため確認ができたものである。確認できた規模で、長さ6m弱、幅40cm、深さ10cm前後を測り底部分は緩やかに北東方向へ傾斜している。位置的に見て第2次調査で報告されている流路2へ流れ込む溝の可能性が考えられた。遺物の出土はない。

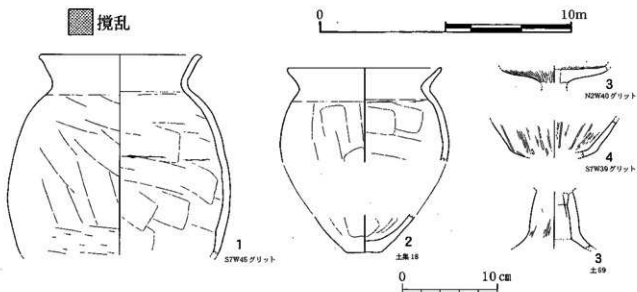
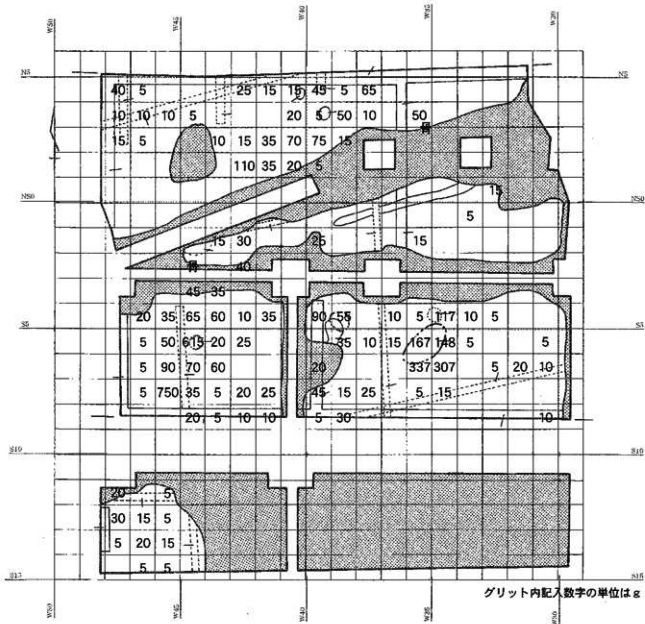
3 出土した遺物

(1) 土器

今回の調査で出土した遺物は、暗渠より出土した近世の陶磁器片数点と時期不明な骨片2点を除き古墳時代中期（5世紀中頃）の土器である。先述のように調査区一面に湧き水が著しく、遺構のプラン把握が難しい状況であったため、土器の多くは土器集中区として取り上げたものである。出土した土器は、そのほとんどがもろくなっており表面がかなり風化していたため、土器片の接合は思っていた以上に進まない状況であった。そのうち5点を図化掲載した。

第6図・1は試掘確認調査時に出土した甕で、本調査時のS7W45グリットにあたる箇所より出土したものである。口縁部から胴部下半にかけて接合復元ができ、その1/4程が残存する。頸部から口縁部にかけてく字状に外反し、胴部は卵形に膨らむ。頸部から口縁部にかけてはヨコナデ調整されており、その屈折部と口縁端部が強くなでられているため、その間はやや肥厚している。胴部外面は概ね縦方向へのイタナデ調整であり、下半の一部に横方向への強いイタナデが認められ、胎土中に含まれる砂粒が動いた痕跡も認められた。胴部内面は横方向へのイタナデであり、一部制作時の粘土積み上げ痕も見られた。復元口径16.6cm、現存高21.3cm、外面はにぶい黄褐色、内面はにぶい黄褐色を呈し、胴部中半の外面にはススが付着している。第6図・2はS5W44グリット、土器集中区18より出土した甕である。縦に半割された1個体の甕が押し潰されたような状態で出土した。接合復元を試みたが、表面の風化がかなり進んでおり、口縁部から底部までつなげて接合することができなかった。口縁部から胴部中半、底部付近を図化してあるが、どこに接合できるのか判明しなかった破片が存在する。口縁部から胴部は約1/4残存、底部は完存する。頸部から口縁部にかけてく字状に外反し、胴部は球形に膨らみ底部は平底となる。頸部から口縁部にかけてはヨコナデ調整で、口縁部が弱くつまみ上げられているためやや内湾している。胴部外面は縦方向へのイタナデ、内面の上半は横方向へのイタナデ、底部付近は縦方向へのイタナデがなされており、内面頸部付近に制作時の粘土積み上げ痕が見られる。復元口径16.2cm、底径3.6cm、推定器高19.6cm、外面は灰黄褐色、内面はにぶい黄褐色を呈し、外面底部付近にススの付着が認められる。

第6図・3はN2W40グリットから出土した高坏の坏部下半の破片資料で、その約1/4が残存する。外面は縦方向、内面は横方向へのヘラミガキ調整がなされており、現存高1.8cm、内外面ともににぶい褐色を呈す。第6図・4はS7W39グリットから出土した高坏の坏部中半の破片資料で、その1/8程が残存する。内外面とも摩滅が著しく、縦方向へのヘラミガキ調整痕が一部に見られるのみである。現存高4.0cm、外面はにぶい橙色、内面はにぶい褐色を呈す。第6図・5は土坑59より出土した高坏の脚柱部の資料で、その約1/4が残存する。外面は表面の剥落が著しく、縦方向へのヘラミガキ調整痕が一部に見られるのみである。内面調整は横方向へ



第6図 グリット毎出土遺物量及び出土土器実測図

のイタナデで、しぼり痕が見られる。現存高 6.1 cm、外面は明褐色、内面はにぶい褐色を呈す。

上記の土器は、その様相が第1・2次調査で出土した土器に類似することから、古墳時代中期、5世紀中頃の帰属時期を与えられると考える。

(2) 自然遺物

N3W35グリット、S2W44グリットより1点づつ骨片が出土している。いずれも遺構に伴うものでなく、時期は不明である。鑑定を日本考古学協会の西沢寿晃氏にお願いした。N3W35グリットより出土したものがシカではないかと考えられる踵骨、S2W44グリットより出土したものが種別は不明であるが中型獣の長管骨の骨体の一部との鑑定を頂いている。

IV まとめ

今回の調査では湧き水にとにかく悩まされた。例年であれば晴天が続く夏季であるが、この夏は天候がぐずつき、長雨、台風が水量を多くした。そして数百年前に作られ埋もれていた暗渠排水施設が、今なおしっかりと機能を果たしており、周辺の水がこれをつたって調査区へと流れ込んできて、状況の悪化に拍車をかけたのである。当初の計画どおり調査の遂行ができなかったのは残念であった。

高宮遺跡は先述のとおり、県下でも非常に珍しい古墳時代中期の水辺祭祀遺跡として認識されており、今回の調査地より西へ200m程離れた第1次調査区では膨大な遺物が出土していた。今回の調査では、量は少ないものの同時期の土器が発見されており、これ等との関連性を伺い知る上で、大切な資料を蓄積することができた機会であったと考える。今回の調査地は、同時期の竪穴式住居等が確認された第2次調査区の南隣にあたる。現況では緩やかに北側へと低くなっていく地形であるが、第3次調査区内の土層堆積状況からは、北が高く南が低い状況が観察された。第2次調査区より遺構・遺物が希薄なことも加えて考慮すると、今回の調査区は居住域の縁辺部にあたるものと判断され、居住域は第2次調査区の範囲から北側、そして国道19号線をはさみ第1次調査区の北東側に及ぶ範囲にあったのではないかと推察される。調査区から近世の暗渠排水施設が見つかった様に、この周辺一帯は地下水位が高い地域である。人々が暮らした古墳時代中頃は何からの要因で地下水位が下がったため居住域に成り得たものと思われるが、それでも高台を選び暮らしたことでであろうと推測する。

最後となりましたがこの度のレストラン建設に際し、埋蔵文化財の記録保存に御理解いただき、多大な御協力を賜りました株式会社アステップ信州の皆様にご感謝申し上げ、本調査の報告と致します。



調査地調査前現況
(北東から)

同上 (南東から)



重機による掘り下げ

コンクリートカッターによる
アスファルト舗装切断





調査地湧水状態（東から）

同上（北東から）



同左 遺物出土状況拡大



試掘トレンチ土層堆積状態および遺物出土状況（東から）





調査地完掘
(北側部分東から)

調査地完掘全景 (北から)

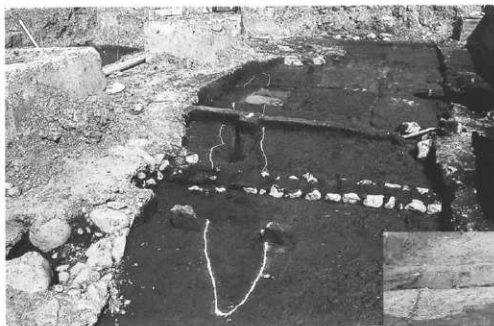


南側部分完掘
(東から)

中央部分完掘 (東から)



北側部分完掘 (西から)



溝2 (西から)

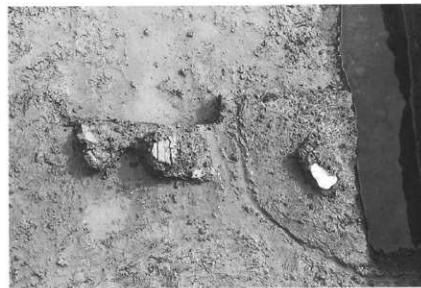
同左
土層堆積断面 (西から)



土器集中区17 (北から)



同左 (北から)



土坑59および土器集中区19 (北から)



土坑59 土層堆積断面 (東から)



土器集中区18 (東から)



暗渠22 (北から)



暗渠18 (西から)



暗渠16 (東から)



暗渠24および暗渠17 (手前) (北から)



暗渠18南側部分および土器集中区17 (北から)



暗渠21 (北から)



発掘調査作業

1m×1mのグリッドを市松模様に掘り下げ開始
(東から)



同上 市松模様に掘り下げほぼ終了
(東から)



同上 1m×1mグリッド掘り下げ完了
(南東から)



調査地北側部分作業状況 (西から)



発掘調査団

長野県松本市 高宮遺跡Ⅲ 報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとし たかみやいせき3							
書名	長野県松本市 高宮遺跡Ⅲ							
副書名	レセプションハウス ザ・ブライトガーデン レストラン建設に伴う記録保存							
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	No.172							
編著者名	和田和雄、山本紀之、菊池直哉							
編集機関	松本市教育委員会							
所在地	〒390-8620 長野県松本市丸の内3番7号 TEL 0263-34-3000内 (記録・資料保管松本市立考古博物館 〒390-0823 松本市中山378-1 TEL 0263-86-4710)							
発行年月日	2004(平成16)年3月25日 (平成15年度)							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たかみや 高宮	ながのけんまつもとし 長野県松本市 たかみやひがし 高宮東209-2他	20202	174	36度 12分 51秒	137度 57分 50秒	20030801～ 20030916	295㎡	レセプションハウス ザ・ブライトガーデン レストラン建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
高宮	集落跡	古墳中期 近世	土坑 5基 溝 1条 土器集中区 3ヵ所 暗渠 9条	土器 陶磁器片		古墳時代中期の遺物が 出土。第1次調査で確 認された水辺祭祀遺跡 の範囲が当所まで広が ることを確認。		

松本市文化財調査報告 No.172

長野県松本市 高宮遺跡Ⅲ

レセプションハウス ザ・ブライトガーデン レストラン建設に伴う記録保存

発行日 平成16年3月25日

発行 松本市教育委員会 〒390-8620 長野県松本市丸の内3番7号

印刷 株式会社 事務 〒390-0828 長野県松本市庄内2-7-17

